

読む楽しみ

青山学院大学名誉教授 じんくう てる お 神宮 輝夫

読書の習慣には誘引が必要なこと

親が読書をする姿を見せなくて、子どもが読書好きになるはずがないという意見をよく聞か、これは自分の経験に照らして真実だと思つてもつとも、私の場合は両親ではなく、六歳年上の兄が読書する姿だった。こんなふうに着くと、ずっと年上の兄が机に向かつて、あるいは縁側の柱にもたれて一心不乱に本を読む姿などを連想する人がいるかもしれない。もちろん、そんなときもあったのだろうが、私がつきり記憶しているのは、風呂に入つて読んでいる兄の姿である。昭和十年代の田舎町の風呂である。もちろん、今のようにはゴキブリも目をまわすくらい明るいバスなどというものではない。湯気がもやもやと上がる天井から本当に薄暗い電球がぶら下がっているだけである。その薄暗い中で、電球に本をかざすようにして、兄は、ほんとうに一心不乱に読んでいるのだつた。

彼が何を読んでいたのかはわからない。なにしろ、六歳年上なのである。しかし、本というものは、あまりよく見えないところでも、一生懸命読むほどおもしろいものらしいことだけは、強く印象づけられた。

本は新世界への入り口だったこと

その印象は、まちがっていなかった。本格的に本を読み出したのは、昭和二十年、中学二年で迎えた敗戦以後だった。あのころ、教師たちは何をどう教えるかに苦慮していたに違いない。ある国語の教師は作文の時間に、朗読の上手な生徒を選んで、幸田露伴や泉鏡花など、明治文

学から大正期の文学を読ませていた。後で感想を書かせたりしないから、ずっと眠つていてもよし、他の事を考えていてもよし、よい授業だった。あの教師は、おそらく、あの方法で、日本の近代文学の常識を与えるつもりだったのだろう。私は、あの読み聞かせ(?)のおかげで、かなりの作品を楽しんだが、作品選択が圧倒的に明治にかたよっていたので、昭和二十三年、旧制の早稲田学院に入つてまもなく、東京の進んだ級友に「太宰が死んだねえ」と話しかけられて、知らないのがばれて恥ずかしい思いをした。

中学三年のときに受けた歴史の授業もおもしろかった。これは、直接自分で本を読んだのではなく、教師が種本からだろう、古代ギリシアの詩人たちの詩を黒板に書いて教えてくれたのである。サッフォーなどという女性の詩人の詩は今もいくつかはつきり覚えていて、『ツバメ号の伝書バト』(アーサー・ランサム)を翻訳していたとき、子どもたちが一羽のハトにサッフォーという名前をつける箇所にぶつかったときは、とても懐かしかった。西洋史の授業としては破格だったのだろうが、私たちにとっては、泰西文学の原点を垣間見させてもらったわけで、わくわくするほどおもしろかった。あまり好評なため、まわりからいろいろ言われたと、後で聞いた。

世の中が複雑になればなるほど、個人の自由領域は狭くなる。しかし、読書は、ほんとうに自由だ。読者は、本が開く新しい世界を心ゆくまで楽しめる。そんな自由な時間を、生徒たちにたくさん用意してやりたい。